

オーケストラ シンフォニカ 東京

第 62 回

定期演奏会

2022年4月10日（日）午後2：00開演

第一生命ホール



OSTについて

OSTの活動は大きく3つの時代に分けられます。

第1の時代は1915(大正4)年に武井守成*¹がシンフォニア・マンドリニ・オルケストラ(1923(大正12)年オルケストラ・シンフォニカ・タケキと改称)として楽団を創設したことに始まり、多くのマンドリン曲を紹介し、合奏コンクールや作曲コンクールを実施するなど斯界をリードしました。1949(昭和24)年武井氏逝去により活動は次第に終息していき、1958(昭和33)年に解散となりました。この間57回の演奏会が開催されました。

第2の時代は武井氏ご遺族より貴重な武井文庫の蔵譜と楽器を譲り受けた杉田村雄*²が理事長として1959(昭和34)年にオルケストラ・シンフォニカ・タケイを復興し、始めました。杉田氏が支配人を務めていた日比谷皇居前の第一生命ホールを会場に毎年の演奏会を重ね、またその場ではギターの優秀な作品に贈られる武井賞の受賞作品も演奏されました。1986(昭61)年の杉田氏逝去に伴い、翌1987年開催の追悼の意を込めた演奏会(定期28回目)で幕を閉じます。

第3の時代は残された団員の合議により幹事制の下で民主的に運営することが決められ始めます。その際に杉田氏ご遺族よりマンドローネ・リュート・セロなどの楽器と杉田氏が収集した楽譜を団として譲り受けました。武井文庫は、当時日本マンドリン連盟理事長でOST団員でもあった市毛氏のご尽力で国立音楽大学図書館に寄贈されました。また、武井氏ご遺族より楽団名「OSタケイ」の改称のご要望があり、それに従い「OS東京」と改称して、1988(昭和63)年の定期演奏会(第29回)を開催しました。これが現在へとつながります。

本日は杉田氏が復興した演奏会より第62回目となります。毎回定演後の最初の活動日に総会が開かれ、すべての事項を決定します。任期2年の幹事団が代表幹事を中心に通常の運営を担当します。指揮者は現在会員の互選によって選ばれています。練習日は杉田氏の時代より毎月第2日曜で固定していて、新加入に関しては団員の了解の下で随時受け入れています。

*1) 武井守成(たけい もりしげ: 1890年10月11日～1949年12月14日)

枢密顧問官武井守正の二男として鳥取に生まれる。宮内省楽部長・式部官長、男爵。

マンドリン合奏団『オルケストラ・シンフォニカ・タケキ』(OST)を主宰し、マンドリン合奏曲・ギター独奏曲の作曲家として活動。また雑誌『マンドリンギター研究』を発刊し、1923年にマンドリン合奏コンクール、1924年に作曲コンクール、1927年にはマンドリンオーケストラ作曲コンクールを開催してマンドリン・ギター音楽の発展に尽力した。

*2) 杉田村雄(すぎた むらお: 1903年2月14日～1986年7月17日)

八王子・南多摩郡多摩村の村医杉田武雄の長男として生まれる。

暁星中学時代、クラスメートの斉藤秀雄とともに比留間賢八に師事、2人で暁星マンドリン倶楽部から静美社音楽部へと音楽活動を進める。

1939年OSTに入団。戦時中、武井守成氏の多摩村東寺方への疎開に尽力し、音楽関係楽譜・資料も戦火を免れる。

武井氏逝去後、OSTの再興にあたり理事長および指揮者を務める。武井氏の楽譜出版に尽力。日伊音楽協会理事長、日本マンドリン連盟副会長を歴任し斯界に貢献された。

 曲 目 解 説

第一 部

コッペリアのワルツ

C. P. L. ドリーブ

クレマン・フィリベール・レオ・ドリーブ（1836年～1891年）はバレエ音楽や歌劇の作曲で知られているフランスの作曲家です。歌劇「コッペリア」は人形職人コッペリウスが作ったからくり人形コッペリアをめぐる楽しい物語。ワルツは、その第1幕で踊られる有名なメロディーです。

「四季」より「7月 草刈り人の歌」

「9月 狩りの歌」

P. I. チャイコフスキー

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840年～1893年）がロシアの音楽雑誌の1月号から12月号にそれぞれの月の性格を音で描写するという企画に基づいて作曲したピアノ曲集『「四季」～12の性格的小品』の第7番と第9番です。この曲集は後にA. ガウクにより管弦楽曲として編曲されています。OSTでは過去に「1月 炉端で」・「6月 舟歌」を演奏しました。「7月 草刈り人の歌」は夏の農村の風物詩、草刈りをする人々の様子を、「9月 狩りの歌」は角笛が鳴り響き、猟犬が獲物を追い、狩人がそれを待ち受ける緊張感あふれた曲想となっています。

コル・ニドライ

M. C. F. ブルッフ

マックス・クリスティアン・フリードリッヒ・ブルッフ（1838年～1920年）はドイツの作曲家です。ブルッフが活躍した時代はハンガリー舞曲集やスラヴ舞曲集など民族音楽が流行っていたようで、彼もまたイングランドやユダヤを題材とした曲を作っています。原曲はチェロのための協奏曲的作品として作られました。今回の演奏ではコンサートマスターを中心としてセカンドマンドリン・マンドラにも一部分、ソロを任せています。「コル・ニドライ」とはユダヤ教の祈りの冒頭部分の言葉。「すべての誓い」という意味とのことです。

(文責 嶋)

第二部

組曲「くだものの舞曲」より

葡萄のミヌエット／柘榴のボレロ／苺のパヴァーナ

武井守成

武井守成（1890年～1949年）が、1948年にマンドリンオーケストラ用に作曲しました。作者が急逝する一月前の1949年11月に開催されたオルケストラ シンフォニカ タケキ（旧OST）第79回演奏会で作者自身の指揮により初演されました。果物の名前を冠する5つの舞曲で構成されています。作者は、「この曲はそれぞれの果物によせてその感じを舞曲としてあらわしたものである」と述べています。

本日は、マンドリンオーケストラ版の作曲と同時期に作者自身によりギター二重奏用に編曲された3つの舞曲、葡萄のミヌエット、柘榴のボレロ、苺のパヴァーナを演奏します。

小舞曲

武井守成（石井啓之編）

1923年に武井守成によりギター独奏曲として作曲されました。その後、作者自身により複数のギター、アルチキタルラ、キタローネの合奏用に編曲されたようですが、楽譜が現存していません。今回はこれをマンドリンオーケストラ用に新たに編曲して演奏いたします。

丘の教会堂

中野二郎

作曲・編曲・譜面収集等を通じて我が国のマンドリン・ギター界に多大な貢献をした中野二郎（1902年～2000年）が、1933年にギター独奏曲として作曲し、1939年にマンドリン五重奏曲として出版しました。

『この曲は静かで敬虔（けいけん）なクリスマスを迎える日の近い教会の風景。粉雪の降る丘の教会堂で讃美歌の練習に余念のない有様を思っ頂ければよい。』と作者は述べています（中野二郎著「いる・ふれっとろ」より引用）。

なお、本日の演奏の低音部には、中野自身の手になるマンドローネパート譜と平山英三郎が追記したコントラバスパート譜の双方を採用しています。

日月潭の歌

鈴木静一

多くのマンドリンオーケストラ作品を残した鈴木静一（1901年～1980年）が1942年に作曲し、1966年に補修したものです。原題は「日月潭の蛮歌」であったようです。作曲された頃は日本の統治下にあった台湾の原住民の古謡によると作者は述べています。日月潭は台湾で最も大きな湖で、国立風景区に指定されており、人気の観光地となっているようです。湖の北側が太陽（日）の形、南側が月の形をしていることから日月潭と呼ばれています（Wikipediaより）。曲は、湖とそれを囲む山々にこだまする太鼓の響きによりゆったりとした空気を描写するアダージョから始まります。途中で激しいリズムとともに人々が激しく躍動する踊りのアレグロモルトに変わり、それがだんだん落ち着きを取り戻しふたたび静寂に戻ります。しかし最後はより激しく急速なテンポと激しいリズムの中に曲は終わります。その描写は映画音楽を生業とした鈴木面目躍如の曲といえましょう。

（文責 石井）

第三部

成婚二重奏曲

G. フィリッパ(中野二郎編)

結婚する二人とそれを祝う多くの人々の幸せな情景が、二つのマンドリンとマンドリン合奏団との協奏曲（一つまたは複数の独奏楽器が主役となり、合奏団が伴奏や対比、協調して構成される曲）で表現されています。愛を語らう二つのマンドリン。そしてそれを祝福し包み込む合奏団の掛け合いが聴きどころとなっています。膨大な作編曲で偉大な功績を残された中野二郎先生が編曲し日本マンドリン連盟によって1994年に出版された楽譜を使用しています。下記に中野先生の解説より抜粋いたします。

作者はイタリア中東部のアドリア海に面した港町、ペサロ（*ロッキーニの出身地）の国立吹奏楽団長で、残念ながら未だにその生死年を詳らかにしない。然しその作品は19世紀末までに多量に出版されており、大半吹奏楽曲であるが、時あたかもイタリアでマンドリン音楽が開花した時期でロマンの薫り豊かでマンドリン合奏曲に移したものが数ある。田舎の祭り、還俗修道士、滅びし国、怯える小鳥、懐かしき追憶などで、既に相当馴染まれたものがあるようである。本曲は永年イタリアで学んだ同志社大学OB指揮者石村隆行君が帰国に当たって未知の沢山の作品を贈ってくれた中の一つ。原曲は管楽器の様々な組み合わせによる二重奏曲である。内容を見ると結婚に至るまでの様々な楽しい思い出を綴った作品のようで愛の二重奏であるが、“成婚二重奏曲”が一番近いのではなかろうか。

熱情（独創的奇想曲）

G. ブランツォーリ

平成 11 年カザルスホールでの第 40 回定演以来 23 年ぶりの再演です。マンドリン合奏の編成にピアノが加わることは比較的少ないのですが、O S T 始祖の武井守成先生の作品にピアノがよく使用されており、その流れで現在も我がクラブではピアノを編成に取り入れています。本曲はオリジナルにピアノパートが含まれ、効果的で重要な役割を担っています。作者は 1835 年生まれ、1909 年に没したイタリアの著名なマンドリニスト、作曲家で教則本を著作するなどマンドリン音楽の隆盛に寄与しました。曲名は直訳すれば「熱き想い」となり、中野先生の曲集の解説には「伯爵令嬢に捧げられている」と記されています。いかにも熱い思いのこもった音楽が正攻法で堂々とまっすぐに奏でられていきます。

序曲 愛の勝利

M. マチョッキ

作者は 1874 年イタリア・ローマに生まれ、1900 年パリに移り 1905 年からマンドリン専門紙「L' ESTUDIANTINA」を発刊し 1939 年まで出版を続け、水車小屋の乙女達、皇帝、ミルタリア、麦祭り、ミレーナ等々、今でも愛奏される佳曲を数多く残しました。平成 9 年に孫娘でピアニストのフランソワーズ夫人が「お祖父さんの作品を好んで弾いてくれる日本に行ってみたい」とのご希望から来日され大分、宝塚、岐阜、東京の各地で地元のマンドリンクラブと演奏会で共演し親しく交流されました。またそれを機に日本マンドリン連盟本部会報 No. 148 にて添付楽譜として本曲のスコアが配布されました。南谷博一監修のマンドリン事典には題名の意味について「愛はどうしても強い、愛は何よりも一番強い」と訳され …」とあります。マチョッキらしい明快で親しみやすい音楽で本日の演奏会を心地よく締めくくりたいと思います。

（文責 山本）

出 演 者

指 揮 者：山本 雅三 嶋 直樹 石井 啓之
 コンサートマスター：田中 尊子 小松崎美奈子

第一マンドリン：田中 尊子 内野 典子 田島 明子 本間 輝樹 高嶋 淳
 ☆小松崎美奈子 高嶋 明美 大口 千秋 神 敏子

第二マンドリン：鈴木 園子 富田 容子 後藤 俊明 渡辺かおる 小林 悦子
 高嶋 友美 木村 栄子 中村 順子 岩崎 宏子

マンドラテノール：宮崎 俊行 滝田ふさ子 関谷 裕子 小谷 文子
 金勝 溪子 伊藤 安子 後藤 成子 ★鈴木 憲靖

ギ タ ー：小林 透 船崎 薫 戸次 脩 五十嵐 豊 澤田 行雄
 ☆高嶋 典子 原島 美歩 門田 雄二 山崎 豊 ☆山本 雅三

リュートモデルノ：☆嶋 直樹 ☆石井 啓之（代表）

マンドロンチェロ：小川真寿美 澤田 理恵

マンドローネ：★加藤 純 ★山口 敦

コントラバス：佐藤 正 石黒不二夫 ★清水 威志

ピ ア ノ：★浦島 晶子

打 楽 器：★飯野 晶子

（★=賛助奏者 ☆=幹事）

《第63回定期演奏会のお知らせ》

◎日時：2023年4月9日(日)午後2:00開演 ◎会場：第一生命ホール(晴海・トリトンスクエア)

連絡先：石井 啓之
 E-MAIL：hi@ishii164.net
 ホームページ：http://ostokyo.info/